

紙質調査による為家本源氏物語の研究

横井 孝
澤山 茂

一 伝為家筆河内本源氏物語

藤原為家（一一九八～一二七五）を伝称筆者とする、大判の古筆切（縦三二センチ、横二六センチほどの、いわゆる大四半切）がある。その残存状況は一群というほどの大量の断簡が確認されている。その、一葉一葉に解体される以前の冊子体の写本を、いま「伝為家筆河内本源氏物語」（「為家本」と略称）と呼んでおくことにする。本稿は、この為家本について、従来の書誌学・文献学からやや離れ、光学的機器による紙質調査を通して、その本来の冊子体を想定する検討を行うおうとするものである。

古筆切研究の基本書であり、かつ一大集大成の書でもある『古筆学大成』によれば、為家本について、

筆者を藤原為家と伝えるが、その真跡ではない。しかしながら、為家の生存期に適合する写本で、古筆家の鑑定

は時代相応というべきものである。本文は河内本の系統。本文中に、朱筆の句読点を打っている。河内本の成立後、ほどこいころに書写された当代類本中にその比を見ない大型本で、高貴の人に進覧された一本ではなかったか。

これら一群の断簡は、「若紫」、「花宴」、「賢木」、「薄雲」、「真木柱」、「竹河」の卷々である。さきの極札により、当初は一具五十四帖の揃いであつたものだろう。江戸時代初期には、すでに右の数帖を残す残欠本となり、それらが分断されたと推察される⁽¹⁾。

とある。ここにいう「為家の生存期に適合する写本」「古筆家の鑑定は時代相応」とは、専門家による書誌学・文献学的観点からの推察である。ただ、そうした判定は、よほど古典籍の扱いに習熟した研究者でなければ得にくいものであろう。あえて言わば、客観性を得にくいということでもある。

それに対して、推定に科学的な客観性を付与する試みもなされてきた。池田和臣は早くから加速器質量分析法による年代測定に取り組み、斯界における科学的観点の導入に寄与してきたバイオニアである。池田は家蔵の伝為家筆真木柱巻の大四半切が、本稿にいう為家本であることを確認し、名古屋大学宇宙環境研究所年代測定部（もと同大学年代測定総合研究センター）との共同研究で、

その結果は、95パーセントの確率で実年代が誤差範囲に含まれる2シグマの誤差範囲 750 ± 39 「BP」を暦年代に較正した値が、 $1255(1271)1282$ 「calAD」。炭素14年代が一二七一年で、誤差範囲の上限が一二五五年、下限が一二八二年である。尾州家本の書写された正嘉二年（一二五八）の年代を含んだ結果が出てい⁽²⁾る。親行の河内本原本に極めて近い書写本の断簡であることが科学的に証明された。

という結果を得ている。科学的なデータが必ずしも国文学の立場に應えるとは限らない。しかしこの場合は、書誌学・文献学の専門的想定と加速器質量分析計AMSの調査結果が対応したわけである。

これらの知見を勘案すれば、藤原為家を筆者に擬せられるところの、一三世紀中盤に五四帖または複数の巻を有する写本が存在したことになる。断簡を含めて平安期の『源氏物語』写本が確認されない現在、鎌倉期写本の存在は希少であり、かつきわめて貴重といわねばならない。その鎌倉期書写と目され、存在が仮想される為家本復元に向けての考究の意義は十分にあるはずなのである。

二 為家本の現状

「為家本」存在の指標となる「伝藤原為家筆大四半河内本源氏物語切」について、先行研究の示すところを交えて概観しておこう。

その指摘は早く一九四三年、堀部正二が尾州家河内本源氏物語と関連のある諸本に言及した際、京都里見忠三郎蔵伝為家筆幻の巻一卷が断簡群と「疑なき同筆のもの」として「大阪切」なるものを挙げ、

（幻の一卷の）他に郷男爵家旧蔵帚木巻一卷・広岡家旧蔵梅枝巻一卷を初め、里見氏蔵手鑑所収賢木巻断簡・下村家旧蔵夕霧巻断簡・戸田子爵家旧蔵手鑑所収某巻断簡などの存在をも知り得た。尚、七海氏も蔵せられる由伝聞したが、すればこの手の源氏も近世まで相当分伝はつてゐたものらしい。（里見本にある了音の極め書には、既

に幻巻一卷為家筆とあるから、江戸中期には分離して、各巻散在する事となつたらしい⁽⁴⁾。

とその所在を指摘する。しかし、右にも「一群といいうるほどの大量の断簡が確認されている」と述べたが、伝称筆者を同じゅうし、形態も近似するからといって真にツレとして扱えるものなのかどうか。

高田信敬は、『古筆学大成』に収める伝為家筆断簡のうちから、(一)～(九)と番号を付した断簡をめぐって賢木・薄雲・真木柱の三巻のみを同筆としている。

為家にあらざるは明かとして、しかし鎌倉時代中期を下ることのない、肥瘦の変化を押えた温潤な筆跡である。なお他にもツレが存在するかの如き報告を見るが、不正確もしくは不親切と思われるので一言しておく。すなわち(二)・(四)・(五)・(八)・(九)（稿者注——賢木・薄雲・真木柱の三巻の例）を他の別筆資料三点と共に一括して掲げるもので、そのすべてを同筆と見ることは無理であるし——図版番号162（稿者注——『古筆学大成』の花宴一卷の如きは列帖装冊子体の改装で、書影から字高を推定すると二八・二糧となり、右の(一)～(九)とは別筆であるのみならず、字高も一糧ほど大——また源氏物語を数手で写し、別筆であつても元来一具と考えるならば、その根拠を示す必要がある⁽⁵⁾。

一方、田中登は「ツレとおぼしき切」と確認できたものとして、薄雲の卷断簡の他に『古筆学大成』に掲載する若紫・賢木・真木柱の切を挙げる。その上で、

その伝為家筆切と同様に、もと縦三〇センチを優に越える大型の冊子本ながら、現在では卷子本に改装されて伝存する巻々が、諸家のもとに何点か伝わっている……

（稿者注——帚木・花宴・蓬生・藤裏葉・柏木・鈴虫・夕霧・幻を挙げる。省略）

ところが、話がいささかやつかいなことに、先に挙げた薄雲巻や若紫・賢木・真木柱の巻々の切と、ここに指摘した巻々とは、明らかに筆跡が違う事である。前者は全体にやわらかく細い線が目立つ筆跡であるのに対して、後者は力強さを押し出した、縦長の文字が目立つ、いわゆる後京極様のそれである。

筆跡を除いた、もと縦が三〇センチを優に越える大型冊子本であることや、至る所に朱の句点が施されている点、さらに一面の行数が十一行である点など、書誌的な面では一致するものの、肝心の筆跡が異なるのでは、これらをもと一具のものであったと、そう簡単に認めるわけにはゆくまい。⁽⁶⁾

と述べている。いま両者の見解をまとめると、次の資料を仮設「為家本」の基礎データとして挙げておくことになる。

▼若紫……………『古筆学大成』第二三巻図¹⁶⁾。久曾神『源氏物語断簡集成』第一部・55。

▼賢木……………『古典籍と古筆切——鶴見大学蔵貴重書展解説目録』所載。ほかに南園文庫蔵断簡と実践女子大学蔵手鑑『筆陣』所収断簡の二葉がある。

▼蓬生……………天理図書館蔵。天理図書館善本叢書『源氏物語諸本集一』（八木書店、一九七三年一月刊）

▼薄雲……………後述の一覧参照。

▼真木柱……………個人蔵二葉が知られている。池田和臣『源氏物語生々流転 論考と資料』（武蔵野書院、二〇二〇年

三月刊)。田中登編『平成新修古筆資料集・第五輯』（思文閣出版、二〇一〇年九月刊）六八所載。

さらに、縦三〇センチを超える形状を持ち、なおかつ右の諸巻と関連もしくは類似するとされる巻々には次のこと
き諸巻がこれまで指摘されている。

【表一】 伝藤原為家筆大四半切と類似する形態の諸本

巻序	巻名	形態	備考・文献
2	帚木	断簡	堀部正二『中古日本文学の研究』（教育図書、一九三三年一月刊、以下「堀部『研究』」と略称する）に「古筆家の為家筆大阪切と称するもので、他に郷男爵家旧蔵帚木卷一卷」とあるのがこれである。『源氏物語大成 卷七・研究資料篇』（中央公論社、一九五六年一月刊）。学習院大学現蔵。
4	夕顔	断簡	堀部『研究』「下村家旧蔵夕顔卷断簡」
8	花宴	卷子本	『古筆学大成』第三卷所収図162。國學院大學蔵。現在卷子本改装されている。一帖分の本文は保存する。渋谷栄一「国学院大学図書館蔵伝藤原為家卿筆『源氏物語 花宴』（一軸について）」（『國學院大學図書館紀要』第七号、一九九五年三月）。
13	明石	卷子本	彦根城博物館蔵。
21	少女	断簡	日比野浩信『はじめての古筆切』83（和泉書院、二〇一九年四月刊）。
26	常夏	折本 （模写）	現存せず、模写本がある。実践女子大学文芸資料研究所蔵。中葉芳子「『伝藤原為家筆源氏物語常夏（模写）』解題並びに翻刻・影印」（実践女子大学文芸資料研究所『年報』第三九号、二〇二〇年三月）。
30	藤袴	断簡	金刀比羅宮蔵古筆手鑑『古今筆陳』所収断簡。聴松室蔵古筆手鑑所収断簡をツレとした（岸本理恵「伝藤原為氏筆『源氏物語』藤袴卷の新出断簡」『関西大学国文学』第一〇四号、二〇二〇年三月）。

32	梅枝	断簡	堀部『研究』「広岡家旧藏梅枝巻一卷」。
33	藤裏葉	卷子本	日本大学総合図書館蔵。『日本大学蔵 源氏物語・第十二巻 鎌倉期諸本集二』（八木書店、一九九六年七月刊）
36	柏木	卷子本	『日本大学蔵 源氏物語・第十二巻 鎌倉期諸本集二』。
38	鈴虫	卷子本	天理図書館善本叢書『源氏物語諸本集二』（八木書店、一九七八年一月刊）
39	夕霧	卷子本	日本大学総合図書館蔵。『日本大学蔵 源氏物語・第十三巻 鎌倉期諸本集二』（八木書店、一九九六年九月刊）。
41	幻	卷子本	堀部『研究』に「京都里見忠三郎氏所蔵の伝為家筆幻巻……もと大和綴の冊子であつたのを両面はがしにして卷子に仕立てたもので（一面は縦一尺三寸横七寸五分であるが相当に裁断されてゐるらしい）」とあるのがこれであろう。現在卷子装。一丁分の欠落があるが、ほぼ一帖の本文を保存する。
44	竹河	断簡	国文学研究資料館蔵断簡（ヨ6―32）。

いまここでこれらを一括して「為家本」として論じようとしているわけではない。竹河の巻切のように明らかな別筆のものがある。これらの巻々が必ずしも「一具であつたはずもなく」、「同筆同型であつても一具をなしていたとは断定しえない」と断ずる高田信敬の見解もある。しかしその一方で高田は、

縦一尺を越える大型冊子本のほとんどが河内本であり、大四つ半切にあつても同様、いずれも毎半葉一〇もしくは一一行写。……大型本と河内本本文の親縁性は注目してよい。源氏物語はいかなる器にも自在に盛りうるわけではなく、書物を写し伝える家ごとの様式の差・学統間での相異等、多角的な考証を必要とする問題だが、すくなくとも鎌倉時代には特定の本のかたちと特定の本文が結ばれる傾向を否定しえないのではなからうか。⁸⁾

とも指摘する。特定の一本が、右の諸巻のように散在しているというよりも、鎌倉期の河内本の周辺領域を——その境界線は明瞭でなくとも——ある程度の範囲で示唆していて、それはそれで重要な事実だと思われるのである。現在のところ『源氏物語』全体に及ぶことがないにせよ、特定の一卷、特定の場面を復元できるのであれば、十分ではないにせよ、古筆切は「本文資料」たりうるはずである。

三 薄雲の巻断簡の調査

断簡といっても無視しがたいのは、当該の伝為家筆大四半切の薄雲の巻である。管見に及ぶだけでも、次表のごとく大量の断簡を集成することができる。しかも、これまでに実践女子大学が集中的に収集したため、後述のように至近で子細に観察することができる便宜がある。

【表二】 伝為家筆大四半河内本『源氏物語』薄雲の巻切一覽

	当該断簡の『源氏物語大成』本文相当頁行数(冒頭～末尾)	所在・掲載文献等
1	六〇四頁10行目「たとらめあ」～六〇五頁3行目「これはやむ」	実践女子大学図書館
2	六〇五頁3行目「事なき御か」～六〇五頁9行目「とをしさに」	実践女子大学図書館
3	六〇五頁9行目「しめてもえ」～六〇六頁2行目「なき事さへ」	国文学研究資料館(ヨ6—30)
4	六〇七頁8行目「とめてたく」～六〇七頁14行目「かれいつか」	個人蔵
5	六〇八頁7行目「よりはなや」～六〇八頁13行目「こえたまふ」	実践女子大学文芸資料研究所

6	六〇八頁13行目「やまさとの」	六〇九頁5行目「れにたり又」	国文学研究資料館〔ヨ6—35〕
7	六〇九頁12行目「人めのとよ」	六一〇頁3行目「うつくしき」	『平成新修古筆資料集・第四輯』
8	六一〇頁5行目「にまいりつ」	六一〇頁10行目「なとやうに」	鶴見大学図書館
9	六一一頁3行目「くしものさ」	六一一頁10行目「かけて中将」	個人蔵
10	六一五頁13行目「おほししら」	六一六頁6行目「きりさふら」	実践女子大学文芸資料研究所
11	六一六頁6行目「ひてこまか」	六一六頁12行目「もほのく」	実践女子大学文芸資料研究所
12	六一六頁12行目「きこゆるに」	六一七頁5行目「ん事ものこ」	実践女子大学文芸資料研究所
13	六一八頁5行目「はのこすゑ」	六一八頁12行目「もおもき所」	国文学研究資料館〔ヨ6—19〕
14	六一九頁11行目「かく心にこ」	六一二〇頁4行目「はへるなり」	実践女子大学文芸資料研究所
15	六一二〇頁4行目「若君はらま」	六一二〇頁11行目「す、みそう」	実践女子大学文芸資料研究所
16	六一四頁9行目「みかとはあ」	六一五頁1行目「るところに」	個人蔵
17	六一五頁1行目「うつりてさ」	六一五頁8行目「もてかしつ」	実践女子大学文芸資料研究所
18	六一八頁1行目「うちゆきか」	六一八頁7行目「ちなるとも」	『古筆学大成』二三巻
19	六二九頁14行目「まさりため」	六三〇頁7行目「なによせて」	国文学研究資料館〔ヨ6—31〕

この一九枚の古筆切はツレと見なされており、国文学の立場からも、あるいは専門ではなくとも文字を見慣れた人にとっても、程度の差はあれ納得のゆくもののはずである。しかも、右に諸家の論述を引いて示したように、若紫・賢木・蓬生・真木柱と、巻の別を超えてツレとおぼしき、同類、同型、同筆跡のものを見出すのである。それゆえに「為家本」仮設の原拠となるわけである。

しかし、従来の書誌学では判断の差異——「揺れ」のあることについてはいかんともしがたい面がある。書誌・筆

跡をもとにしたツレの判定で、各論者に差異が生じていることは右に触れた通りである。「賢木・薄雲・真木柱の三卷のみを同筆」「薄雲卷や若紫・賢木・真木柱の卷々の切」のみをツレと見る厳密な態度から、ほぼ疑うことなく一連の伝為家筆断簡と同一視する論述、同様な形態・類似した筆跡を通して緩やかにまとめて取り扱うとする意見、等々、必ずしも見解が統一されているわけではない。

また、実践女子大学が収集した一連の薄雲の巻の料紙は、1・2、10・11のごとく表裏揃ったものは原型に近い形状のはずだが、見るからに大判の紙であり、現在でも肌理細やかで滑らかに見て取れる。この紙質について、諸家の評価は次のようになっている。⁽⁹⁾

鳥の子薄様(花宴)	………	渋谷栄一
鳥の子(花宴)	………	小松茂美
白斐紙(賢木)	………	高田信敬
斐楮交澁紙(薄雲)	………	加藤昌嘉
斐紙(薄雲)	………	田中登
斐紙(薄雲)	………	池田和臣
斐紙(真木柱)	………	池田和臣

こうした判断は、主として風合などと称する肉眼による観察、指先などの手触りなどによるものであり、大きく観察者の経験や主観に傾かざるを得ない側面がある。もとより、稿者たちには先学の見識について論う意図はない。た

だ、従来の判断方法はある意味職人芸的な眼力を要するものであり、紙質の判断など客観化するのが難しいのではないかとこの懸念を抱くのである。

その客観化の方法を求めていた稿者たちは二〇一六年から江南和幸⁽¹⁰⁾（龍谷大学名誉教授）の指導を受けて共同研究をスタートさせ、二〇一九年以降は実際に3Dマイクロスコープ（Keyence製 VHX-7000）を用いて『源氏物語』の写本等の用紙の分析を試みてきた。その一端は稿者のひとり横井が既に公表したが、紙幅を鑑みて次のような概観を述べるに留まった。

- (1) 為家本はコウゾを主体とし、ガンピの繊維を含む用紙で構成されている。肉眼で観察する従来の方法は判断を誤りやすい。マイクロスコープの力は絶大である。
- (2) 為家本には丹念な打紙加工がされている。『源氏物語』写本には打紙がなされている例を見るが、為家本ほどの例を見いだすのは難しい。
- (3) 為家本は熟練の研究者にガンピと見誤らせるほどの上質紙であり、かつ縦三〇cmを超える大判の紙を周到に用意した上で書写されている。

(1)(2)についてはマイクロスコープによる観察そのままである。現在のところ混漉というほどではないものの、実践女子大学蔵の薄雲の巻断簡で観察するかぎりにおいては、コウゾが主体に見える中に雁皮の繊維屑（導管・甘皮など）を容易に見出すことができる。これは後掲の画像等によって実際に判断されるはずである。

また、(3)については、当然これはマイクロスコープの画面から看取できる問題ではない。ただし、画像から読

み取れるものを演繹すれば、おのずと浮かび上がる次の課題である。ために、既出前稿では、このような古筆切一葉ですら紙繊維を大量に消費するものが、冊子全体あるいは複数巻の料紙全体を賄う必要があると前提するならば、として次のような見解を提起した。

『源氏物語』は書写のためには厖大な紙を消費する作品である。全五四帖揃いの場合はなおさらである。清書だけで二三五枚必要という試算も出されている(倉本一宏)。こうした厖大な大判の紙を調達できる社会・経済・政治環境はどのようなものか、それは書写作業の管理運営の問題と連結するものなのか……

為家本は『源氏物語』写本のなかでもとりわけ良質の用紙に書かれている。それは目視でも十分理解できると思われる。マイクロスコープ画像でも、後掲のごとく、繊維の目の詰んだ、打紙が丹念にほどこされた、手の込んだ良紙であることが見て取れる。そうした用紙を大量に準備できた上でなされた写本の制作は、それを成立させ得る経済的・社会的・政治的な環境があつたことを物語る。今回はその推論まで踏み込むことはできないが、次なる課題であることは間違いないだろう。

(横井)

注

- (1) 小松茂美『古筆学大成 第二三巻 物語・物語注釈』(講談社、一九九二年六月刊)四〇〇頁。
- (2) 池田和臣『源氏物語生々流転 論考と資料』(武蔵野書院、二〇二〇年三月刊)Ⅶ『源氏物語』関係古筆切資料「四六〇頁」。
- (3) 伝為家筆河内本幻の巻一卷については、横井孝・江南和幸・澤山茂「為家本源氏物語『幻』の紙質と筆者」(シンポジウム「紙のレンズから見た古典籍——高精細デジタルマイクロスコープの世界」実践女子大学文芸資料研究所、二〇二一年三月一四

- 日、ウェビナーで開催)で言及した。本稿でも画像のいくつかを紹介するが、別稿で詳述する予定である。
- (4) 堀部正三「源氏物語雑々私記」(『中古日本文学の研究——資料と実証』、教育図書、一九四三年一月刊)一〇九—一一〇頁。
 - (5) 高田信敬「源氏物語の古筆切 二種」(『源氏物語と源氏以前 研究と資料——古代文学論叢第一三輯』武蔵野書院、一九九四年二月刊、所収)二九二頁。
 - (6) 田中登「伝藤原為家筆『源氏物語』薄雲巻断簡の紹介」(実践女子大学文芸資料研究所『年報』第二八号、二〇〇九年三月三〇頁)。
 - (7) 【表一】は、小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」(伊井春樹編『本文研究—考証・情報・資料—第6集』和泉書院、二〇〇四年五月刊、所収)、大内英範「源氏物語 鎌倉期本文の研究」(おうふう、二〇一〇年五月刊)を参照した。
 - (8) 前掲注(5)論文、二九五頁。
 - (9) 小松茂美『古筆学大成』。洪谷栄一『【表一】掲出論文。高田信敬『注(5)論文、田中登『注(6)論文。加藤昌嘉』「河内本源氏物語 薄雲巻」(国文学研究資料館編『古筆への誘い』三弥井書店、二〇〇五年三月刊)。池田和臣『「源氏物語の古筆切」(中央大学文学部『紀要』第九一号、二〇〇三年三月)、のち注(2)著所収。同「『源氏物語』コレクション 解説」(『人物で読む『源氏物語』第六巻——紫の上』勉誠出版、二〇〇五年六月刊)。
 - (10) 江南和幸「コデイコロジと紙の科学的分析学との邂逅——科学的コデイコロジの提案」(シンポジウム『紙のレンズから見た古典籍——高精細デジタルマイクロスコープの世界』資料集』二〇二一年三月一三—一四日、実践女子大学文芸資料研究所)、「紙は時代の目撃者…紙の化学分析が語る知の文明の歴史——私立大学ブランディング事業…実践女子大学「源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成」に寄せて」(実践女子大学文芸資料研究所『年報』第三九号、二〇二〇年三月)など。
 - (11) 横井孝「源氏物語写本の打紙は何を語るか——「伝為家筆本」の位相」(『書物学』第一九号、二〇二二年二月)。

四 為家本調査の前提として——和紙概説

古典籍を形成する用紙について、国文学においても書誌などで言及することは少なくない。しかし、「物」としての紙については案外注意を払わないのではないか。

原料、産地、抄紙法が異なり、それぞれ用途の異なる和紙類について、その風合いを感覚的に捉えるには、それなりの目利きが必要であった。和紙の先行研究で報告されてきたものでは、試料から靱皮繊維の一部を取り出し、光学顕微鏡による紙繊維観察、繊維や填料を色素で染色して観察する化学試験、物性測定などの破壊試験が行われてきた。今回、観察機材として用いた高精度3DデジタルマイクロスコープVHX-7000では、何がどのように観察できるのか、何が分かるのかについて例をあげて概説し、延いては、本稿の主題である為家本源氏物語における紙質について分析の結果を報告したい。

本機材は、LEDを光源として、デジタル画像を4Kという高解像度で撮影することができ、非破壊法による観察であるため、試料に損傷を与える心配がないのが大きな利点となっている。通常のマイクロスコープの光源は反射であるが、これは光量・光源の位置を変化させた撮影が容易であり、透過光による通常の光学顕微鏡としての観察をすることも可能である。標準の機能を用いても擬似的に走査型顕微鏡(SEM)モードによる観察、さらに各種タッチメントによる付加価値的な観察(例えば偏光観察)なども備えている。画像処理能力が優れているため、撮影したデジタル画像から細部の計測も可能であり、その機能を用いての観察を行っている。

日本の古典籍を彩る和紙の原料は、「楮(コウゾ)」「雁皮(ガンピ)」「三桮(ミツマタ)」が主であり、時代の変遷がある⁽¹²⁾。鎌倉期・室町初期では特殊な例を除いて、ほぼ楮・雁皮に限定されると見て差し支えない。こうした植物の外皮

の下にある鞆皮(柔らかい内皮)繊維が紙の原材料として用いられてきた。この鞆皮繊維はいずれも繊維長が長く、強靱で、光沢があり、和紙の特徴の一つである薄くて強い性質をもたせることができる。その他に麻・桑・竹・藁なども用いられた例がないわけではないが、『源氏物語』について稿者たちが観察した写本・古筆切・刊本においては、特異な例を見ない。

「楮」(*Broussonetia Kazonoki* Sied.) は奈良時代から紙の主原料であるが、奈良朝以降ガンビが一般的に用いられるようになる。コウゾは繊維がやや粗剛であるため、優美なめらかな紙質ではないが、強靱性に優れている。コウゾの繊維は帯状に長く、所々に結節があるため叩解すると一部の繊維が相互に絡み合って「双眼」という結節をつくるため、機械による打解には不適で、手打叩解する必要があるとされる。マイクロスコープの観察の際に、この結節が「楮」の見極めの基準のひとつになる。下記の画像で注目して頂きたい。

「雁皮」(*Wikstroemia Sikokiana*) は古くから日本に自生している野生種であるが、コウゾに比して栽培が困難であり、生産量に差があった。鞆皮繊維は抄紙原料としては最高級であり、亜麻や大麻に見られる結節がある。見かけ上ミツマタの繊維に酷似している。抄紙した和紙は優美で光沢があり半透明で結着力がある。マイクロスコープの観察の際には、コウゾに比べてより細い素材であるところに特徴があることに注意すべきであろう。

「三桮」(*Edgeworthia Papirifera* Sied.) は、枝が三つの股に分枝していることから命名されているという。三桮の鞆皮は細小で光沢があり緻密である。コウゾに比べると繊維長はかなり短く、強度もやや劣るものの、紙の天敵ともいうべき紙魚がつきにくく、優美な光沢がある。明治以前の三桮紙は粗雑で着色も見られたが、現在はアルカリ処理により製造法が改良され、純良な紙質となり「改良半紙」、「局紙」「貨幣用紙」として利用されている。江戸期の典籍には多く見受けられ、コウゾと漉混されたりミツマタのみでも漉かれたりしたが、室町期以前の『源氏物語』写本の使

用例にはこれまで出会ったことがない。

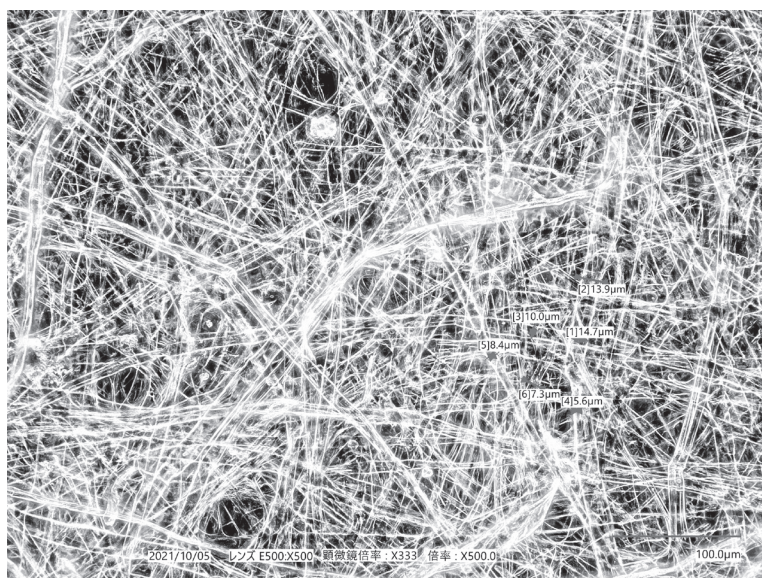
これら各種原料の繊維長は、世良明ら⁽¹³⁾が繊維を測定したところでは、コウゾが最も長く平均11mm、次いでガンピが4.6mm、ミツマタが4.1mm、また、繊維幅はコウゾが16 μ m、ミツマタが11 μ m、ガンピが7 μ mと報告されている。

関義城⁽¹⁴⁾は西田屹二『木材化学（上巻）』を引きつつ、コウゾの繊維長を2376～0.94mm、ガンピを530～232mm、ミツマタを514～0.70mm、繊維幅はコウゾ42～7 μ m、ガンピ20～10 μ m、ミツマタを23～14 μ mと表示する。

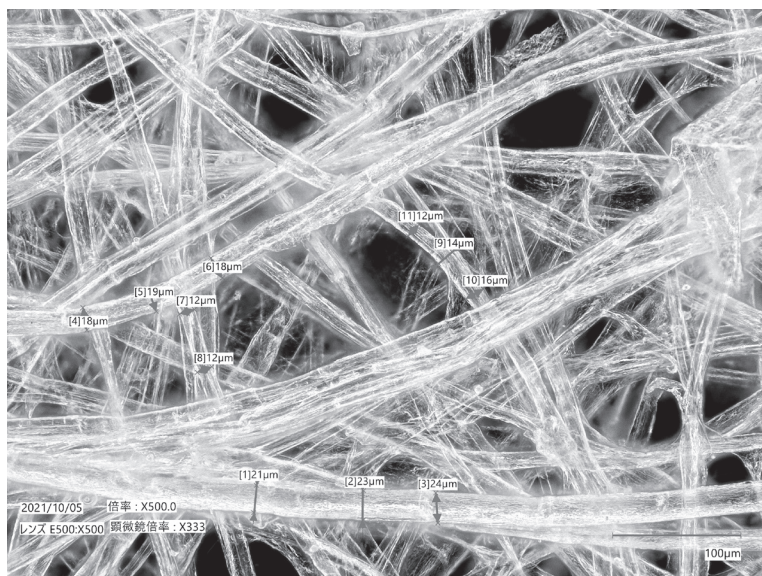
さらに、大川昭典ら⁽¹⁵⁾によれば、繊維長はコウゾが6～21mm、ガンピは3～5mm、ミツマタは3～5mm、繊維幅はコウゾ10～30 μ m（0.010～0.030mm）、ガンピ10～30 μ m（0.010～0.030mm）、ミツマタ10～30 μ m（0.010～0.030mm）と測定している（mmはマイクロメートル。1mmの千分の一。ミクロンと同）。

ただ注意しておかねばならないのは、諸家により計測の結果にかなりの差異が生じていることである。今後の観察のために一応の目安がほしいところではあるのだが、このバラつきでは有意な数値とはいえないだろう。しかもこうして具体的な数値を示されると、数字が一人歩きしては困ることが少なくない。マイクロスコープによる画像分析の際、後述する「打紙^{うちがみ}」が施された繊維は当然繊維幅が拡張され、右のような数値にはならない。数値が先入観となって眼前の画像の特徴を見逃すことがあれば、それは本末転倒というしかない。コウゾに比してガンピ・ミツマタの繊維幅の値の小ささは指摘できるが、数値は必ずしも標準化したいということなのである。

次頁に「雁皮」「楮」「三桠」の標準的な画像を挙げておこう。

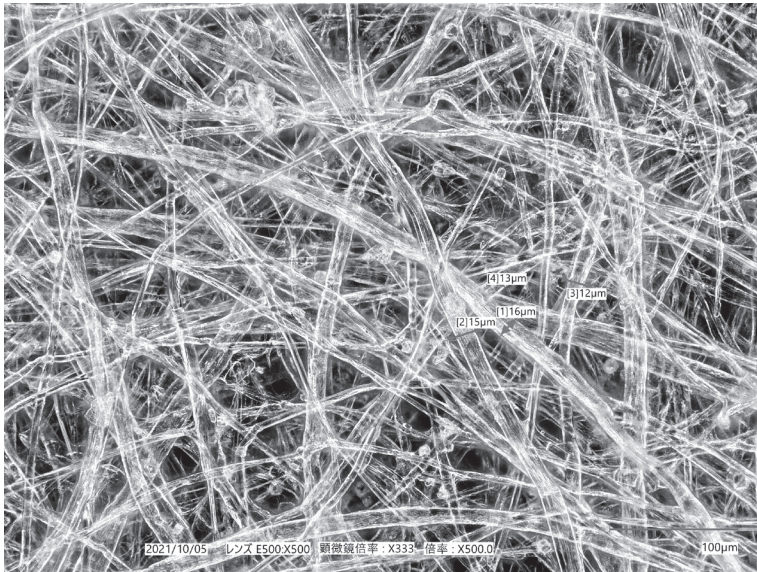


【図1—a】 純雁皮（さざなみ01） 五〇〇倍画像



【図1—b】 純楮（さざなみ08） 五〇〇倍画像

【図1—c】 純三桎（さざなみ23） 五〇〇倍画像



【図1—a—c】は「成子紙工房」製『特撰さざなみ紙譜』『さざなみ紙譜』見本紙よりサンプルとして用いた。

本学の私立大学ブランディング事業「源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成」の三本柱のうちの第一のプロジェクト「和紙の光学的研究」において、古典籍の用紙の捉え方は重要課題であった。①中国・アジア世界から日本へという歴史の変遷を踏まえた和紙の位置づけ、さらに②アラブ・ヨーロッパにおける製紙の状況と和紙の接点という空間的広がりの中の和紙の位置づけ、また③現代の紙に至るまで、ほろ布繊維を初めとして、大麻・穀（カジノキ）紙・竹紙・粟藁・稲藁など多様な原材料を駆使して「紙」を製造した事実、などのスケールの大きな江南和幸の教示^⑬に依拠し、奈良時代から室町・江戸期の典籍に用いられた「紙」に、まことに大まかではあるが、各時代の指標を得ようとしている。紙を平滑にするための方法としての「打紙」、または充填材としての「米粉」などもまた、紙の様相を見極めてゆくための指標である。これは次の章で述べ

る。

為家本源氏物語は、加速器質量分析計 A M S の調査結果では「上限が一二五五年、下限が一二八二年」の成立という。一三世紀半ば、鎌倉期の作品ということが判明している。この時代であれば、すでに和紙の抄造法は流し漉きであり、原材料も上記したようにほぼ限定的である。実践女子大学所蔵品で例を挙げるならば、図書館蔵古筆手鑑「筆陣」の冒頭を飾る伝聖武天皇筆「賢愚経」、奈良時代の古筆の名品の一つ「大聖武」のごときは「溜漉き」の代表例といえよう。

因みに、「溜漉き」は平安・中世以降の典籍に親しんできた人には目馴れぬものであるが、「大聖武」のように平安期以前の例に多く見られる初期的方法である。植物繊維は、水中で沈殿しようとする性質（沈降性）と集合しようとする性質（凝集性）の二つの性質を併せ持っており、和紙を抄紙する際には、この二つをコントロールしなければならぬ。抄紙時の沈降性をできるだけ抑制するために、繊維を十分に叩解し枝状にする必要がある。これをフィブリル化という。一方、凝集性を抑制するためには靱皮繊維をできるだけ短くすることが要求される。「溜漉き法」は、漉桁により原料液を流し込んだ後に水分の自然濾過により脱水し、漉き簀の上に紙料を残す方法である。厚めの紙や土粉などを入れて漉く場合に適している。この方法で作られた和紙の表面は凹凸が多く滑らかではない。そのため、石盤や木槌などで紙の表面を打ち、平坦にする「打紙」加工が行われた。また、この方法は時間と人力を必要とするため、大量生産は困難であったと考えられる。

この溜漉きの欠点を克服するために考案されたのが「流し漉き」であり、簀桁（すけた）の中に原料液を汲み込み漉桁を揺すって繊維を絡める様子、さらに桁から簀を持ち上げて「紙床」（しと）に重ね置く仕草を示す動画や画像で現在でもよく知られた方法である。流し漉きは繊維の長さを生かして漉く方法で、紙料溶液に「ねり」（トロロアオイなどの根から抽出した粘性のある液体）を加え、漉桁を上下左右に揺り動かして紙層の厚さをコントロールする方法である。溜漉きに比較してより薄い和紙を作ることが可能になったものである。

五 為家本の「打紙」加工

高級な和紙には筆の運びを滑らかにするために、抄^すかれた後に紙を打って表面を平滑化することが行われている。「打紙」と呼ばれる加工技術である。「溜漉き」の時代から「打紙」が行われていたことは前章に触れたとおりである。これが「流し漉き」されるようになってからも同様に「打紙」がなされていたことも既に周知の事実である⁽¹⁸⁾。

関義城『和漢紙文献類聚 古代・中世編⁽¹⁹⁾』は、日本最古の書たる『古事記』から室町時代の宮廷の記録『御湯殿の上の日記』に至るまで、中国の文献・大日本古文書に至るまで、紙に関わる本文を網羅した便利きわまる資料集である。これに入木道の伝書『麒麟抄』を引いて、

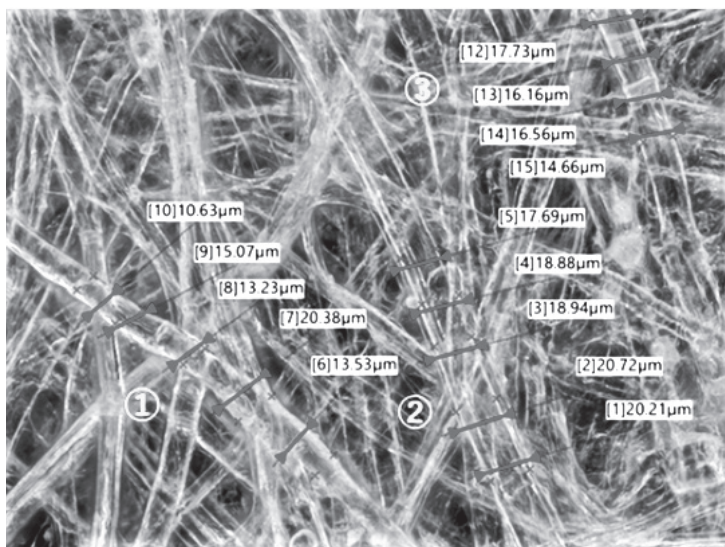
一、檀紙打紙には筆を浮て緩々と取て静に可レ書、打紙には墨を厚く摺る。檀紙には薄く摺る。

とある。紙の特性に合わせて書き方、墨の濃淡などについて述べられている。古筆上の墨の表情についても観察すると墨の成分、硯からの抽出成分など有益な情報が得られそうである。

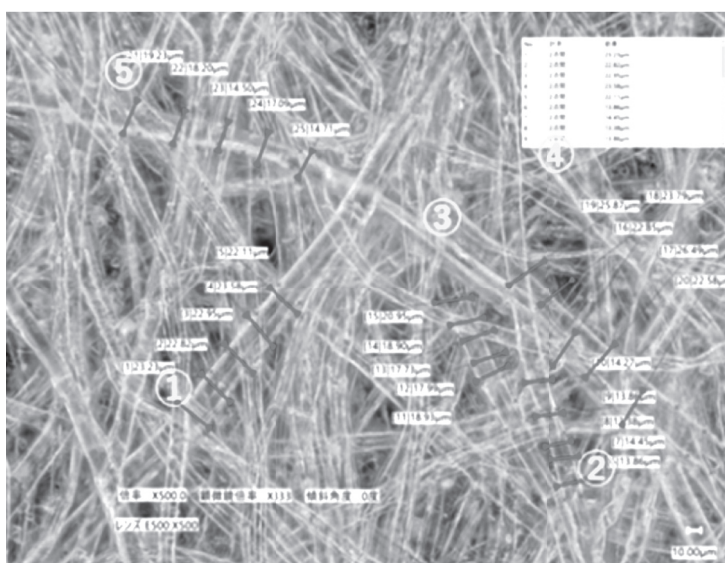
【図2-a・b】に楮の打紙前後の違いを示した。用いた試料は、宍倉佐敏編著『必携古典籍・古文書料紙事典⁽²⁰⁾』に付属する和紙見本帖から「楮打紙なし」「楮打紙あり」の紙片を、デジタルマイクロスコープVHX-7000を用いて五〇〇倍で観察し、繊維幅を計測した結果である。

打紙なしの繊維幅は平均17 μmであるのに対し、「打紙あり」は部位① 22.94 μm、② 13.96 μm、③ 18.90 μm、④ 24.32 μm、

次に示す【図3】は紙の温度株式会社(愛知県名古屋市中熱田区)が市販している打紙で、「古代紙」という名称である。



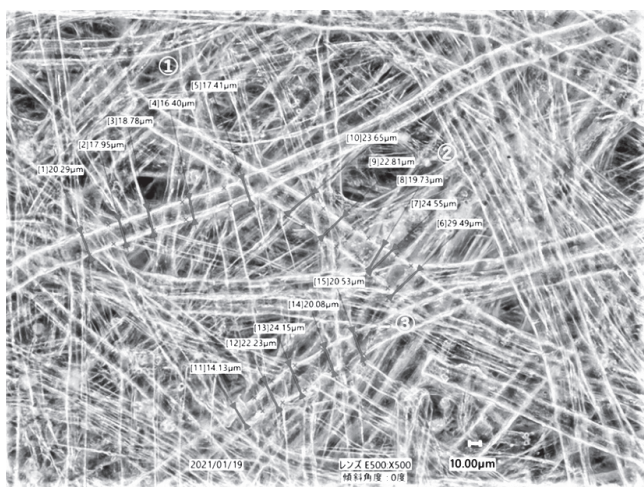
【図2—a】 楮打紙なし (宍倉 [2011] 和紙見本帖より)



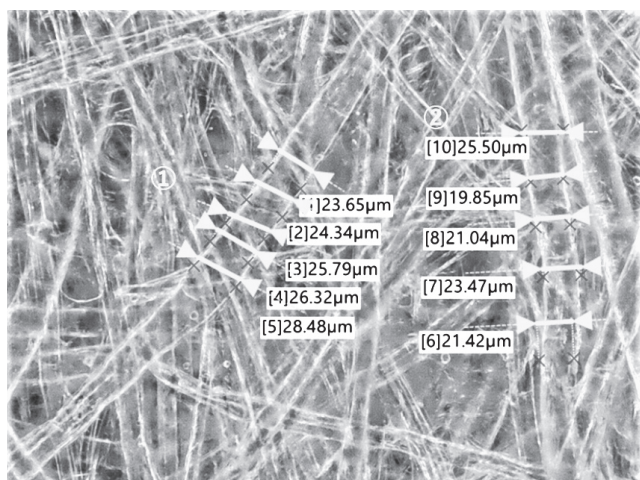
【図2—b】 楮打紙あり (宍倉 [2011] 和紙見本帖より)

⑤ 16.57μmで全体の平均19.37μmとなり、約一％増加している。目視でも繊維間が詰まっているように観察される。

【図3】 【図4】ともに五〇〇倍の画像である。



【図3】 雁皮（古代紙）打紙（紙の温度株式会社製）



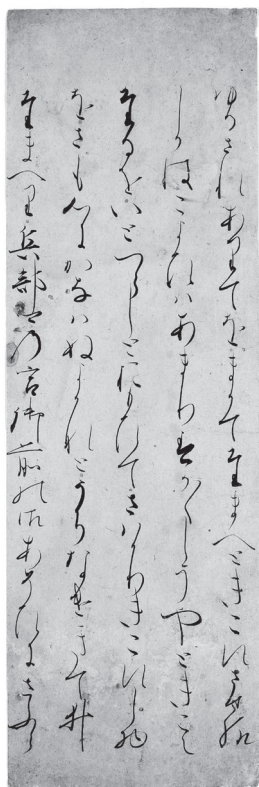
【図4】 楮（高野紙）打紙（紙の温度株式会社製）

原料は雁皮で「溜漉き法」であり、奈良時代の抄紙技術を再現したものという。という打紙で、和歌山県高野山産楮を原料としている。漉き方は溜漉き法で、漉いた後簀を立てかけて水を切り、圧縮していない。干し方も他の地域とやや異なるようであるが、地合はふつukらしした感じがある。

【図3】の繊維幅は、部位①17.81 μm 、②22.65 μm 、③20.69 μm 、全平均が20.52 μm となる。【図4】の繊維幅は、部位①が25.76 μm 、②が22.26 μm 、全平均が23.99 μm となる。以上は現代紙ではあるが、原材料がガンピであるかコウゾであるかだけでなく、その植物繊維の産地を含めて素性が明確である点において、第三者の不確定な数値に振り回されずに済む。

為家本を見てみよう。「伝藤原為家筆真木柱の巻大四半切」の一枚「ゆるされありてを」の全体像が【図5】である。縦三二・九cm、横一〇・二cm（現在は五行しか存しないが、残り六行あったものの残簡。全体では横二六cm余りだったらしい）という破格に大判の古筆切である。このほぼ中央左寄り、四行目「かなはぬ」五行目「兵部卿」の間をVHX7000で五〇〇倍にして観察した画像が、次の【図6】である。

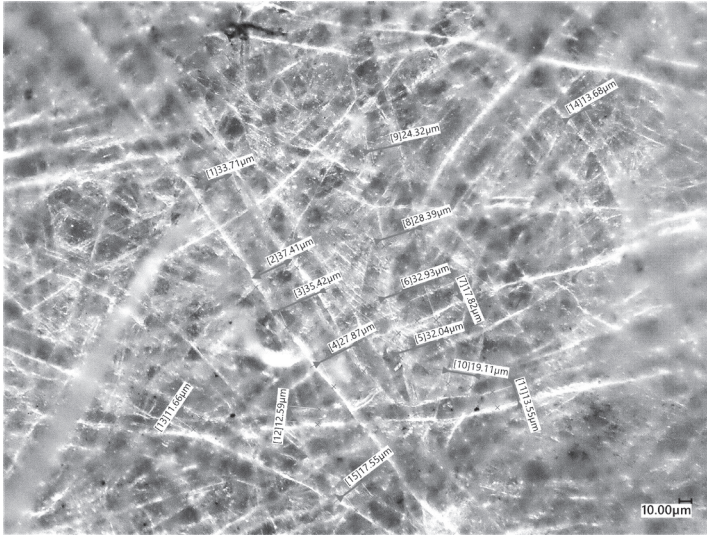
計測した一五箇所の全平均は23.87 μm 。【図4】の高野紙(吉沢紙)を打紙にした例との近似値が得られた。もともと、紙の温度の高野紙は純楮紙との触れ込みであるが、【図5】の為家本は、その紙質についての検証をここではまだ行っていない。本稿第三章に述べたように、これまでの書誌学の立場からは「鳥子紙」「斐紙」「斐楮交漉紙」など見解が分かれていた。



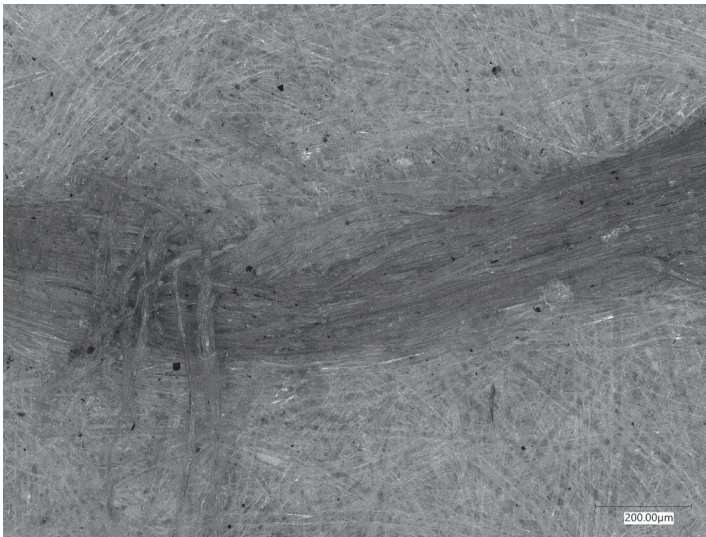
【図5】「為家本」真木柱の巻断簡「ゆるされありてを」

【図6】は、【図2】～【図4】のような隙間がなく、全体により丹念な打紙加工がなされているごとくに見受けられる。30 μm を超える幅広の繊維（コウゾである）が認められることでも分

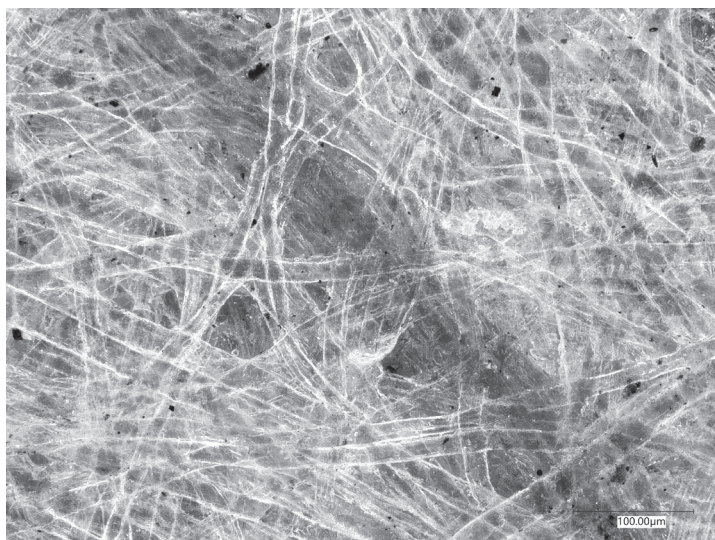
かる。37.41 ～ 24.32 μm というものと 19.11 ～ 11.66 μm というものを同様に見なしてよいものだろうか。その疑問への回答と考えられるものが【図7】である。



【図6】真木柱「ゆるされありてを」500倍 繊維幅計測



【図7】真木柱「ゆるされありてを」200倍 雁皮繊維
(江南和幸撮影)

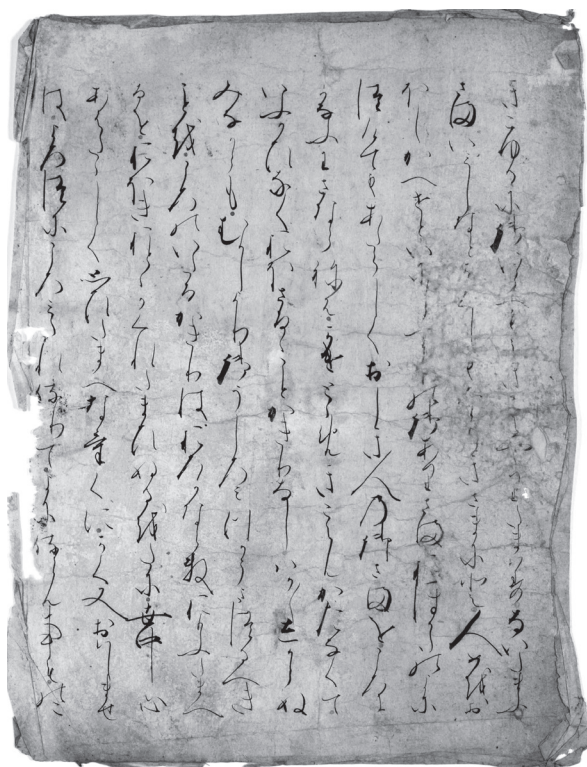


【図8】薄雲「きこゆるに御いらへも」500倍 雁皮繊維

【図7】は同じ古筆切「ゆるされありてを」の二行目の中央付近、「あまり」の「ま」の横を二〇〇倍に拡大した画像である。画面中央横長に、周囲の繊維よりは明らかに色濃い繊維が束になって横たわっている。低倍率ではあるが、この束状の繊維は周囲の色の薄い繊維よりも細いことが看取されるはずである。江南和幸（前掲）の指導により、これは明らかにコウゾとは異なる繊維で、「雁皮繊維の束」と判明した。つまり、この古筆切の用紙は、コウゾにガンピを漉き混ぜた紙なのであった。

【図8】は薄雲の巻の古筆切「きこゆるに御いらへも」（全体画像【図9】）の一行目「きこゆる」の「ゆ」字の左側を五〇〇倍にしたものである。ここにも左上から右下へ斜行する色の濃い部分が看取でき、これもその周囲のための繊維と比べれば、明らかに細い繊維の束である。【図7】の場合と同様であり、ツレとして共通の紙

の表情（モルフォロジー：Morphology）を読み取ることが可能である。「為家本」には、このようにコウゾ繊維の中に、一定量のガンピを混ぜ漉きした紙が用いられていたと推定することができる。コウゾとガンピの差異は、打紙加工さ



【図9】「為家本」薄雲の巻断簡「きこゆるに御いらへも」
(実践女子大学文芸資料研究所蔵)

れた後でも画像としては顕著に現れている。

以上を簡略にまとめよう。

(1)「為家本」の紙にはコウゾとガンピの混ぜ漉きを認識する事が出来た。従来の目視による書誌学における「為家本」の紙質について判断に揺れが生じていた問題はこれで解決したことになる。コウゾとガンピの割合を数値化するのは次の課題である。

(2)また、その繊維幅を測定すると「打紙」の加工がなされていること

但し「為家本」の場合、打紙はより丹

(澤山)

が分かった。抄紙の際に表面の平滑化を図るために打紙は特殊な技法ではない。念なものであったのではないかと推測される。

注

(12) 前掲注(10) 江南稿「紙は時代の目撃者…紙の科学分析が語る知の文明の歴史——私立大学ブランディング事業…実践女子大学「源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成」に寄せて」など。

- (13) 世良明『木材研究』（『京都大学木材研究所報告』第一三号、一九五四年）。
- (14) 関義城『手漉紙史の研究』（木耳社、一九七六年七月刊）、四八頁。
- (15) 大川昭典「楮・三桧・雁皮繊維の鑑別」・同「文書料紙の填料の観察」（『紙素材文化財（文書・典籍・聖教・絵図）の年代測定に関する基礎的研究』平成一五年度―一七年度科学研究費補助金（基盤研究（A））研究成果報告書、研究代表者＝富田正弘、二〇〇八年三月）。
- (16) ENAMI Kazuyuki, KATO Masato, YANO Takatsugu, KOHNO Masuchika, Mark Barnard and Kumiko Matsuoaka : "Analysis of morphology of and elements on the paper specimens of the Stein collection of the British Library". Tradition and Innovation : proceedings of the 6th IDP conservation conference. The National Library of China. The British Library. 2007. pp. 37-51. ENAMI Kazuyuki, SAKAMOTO Shoji, OKADA Yoshino, KOHNO Masuchika : Approach to the History of Social and Cultural Life in Medieval China and central Asia through the Scientific Analysis of Paper. "DUNHUANG STUDIES : PROSPECTS AND PROBLEMS FOR THE COMING SECOND CENTURY OF RESEARCH". pp. 39-40. Irina Popova and Liu Yi eds., Russian Academy of Sciences Institute of Oriental Manuscripts. 2012. 「紙は時代の目撃者：紙の科学分析が語る知の文明の歴史——私立大学ブランディング事業：実践女子大学源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成」に寄せて」（前掲注10）稿。
- (17) 一例として「和紙職人／奈良吉野の紙漉きの里：文部科学省」（<https://www.youtube.com/watch?v=MamvGEWA6HU&list=PL76F2B447B13008E4&index=10>）を挙げておく。
- (18) 実は「打紙」技術の詳細は不明であった。鈴木七実・大和あすか「打紙の復元実験——平安後期伊勢物語絵巻の想定復元を通して」（シンポジウム『紙のレンズから見た古典籍——高精細デジタルマイクロスコプの世界（資料集）』二〇二二年三月二一／二四日、実践女子大学文芸資料研究所）は「湿らせておいた紙を5枚重ねて御影石の上に置き、その上に牛皮を被せ、木槌で「打ち、紙を乾燥させた後、「猪牙で繊維方向に合わせて擦り、両面を磨く」という方法を実験した。のち、大和あすか・鈴木七実「打紙再現試料から繊維の形状と表面の粗さを見る」（『書物学』第一九巻、二〇二二年二月）にまとめられた。
- (19) 関義城『和漢紙文献類聚 古代・中世編』（思文閣、一九七六年一〇月刊）。
- (20) 穴倉佐敏編著『必携古典籍・古文書料紙事典』（八木書店、二〇一一年一二月刊）。

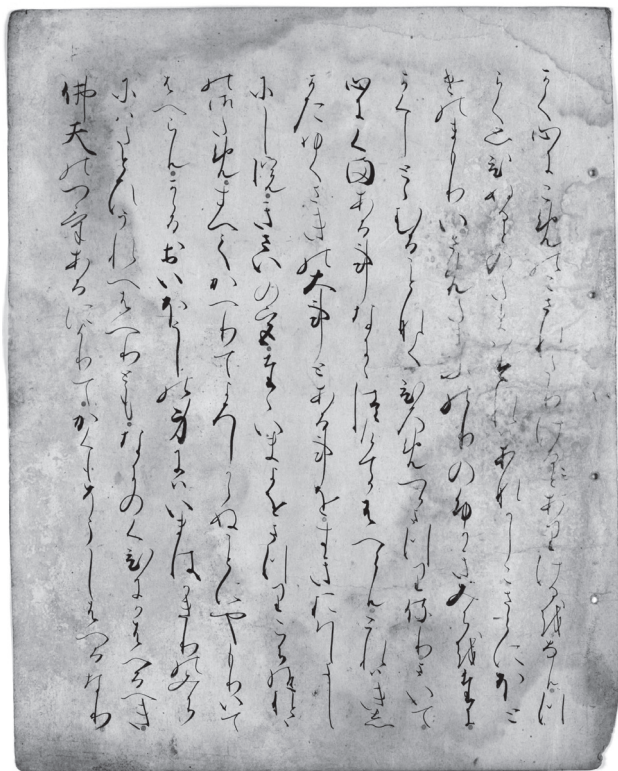
六 紙質調査による為家本のツレの探索

前章では、「為家本」における紙の繊維の特定を行うと同時に、打紙加工の様相を観察してきた。3Dマイクロスコープでは微細な繊維構造を覗きこむだけではなく、その画像を読み込むことによって、その共通性、均一性が見て取ることができる。逆に言えば、古筆切のツレや古典籍の僚卷・僚冊をマイクロスコープ画像から読み取れる可能性があるということでもある。

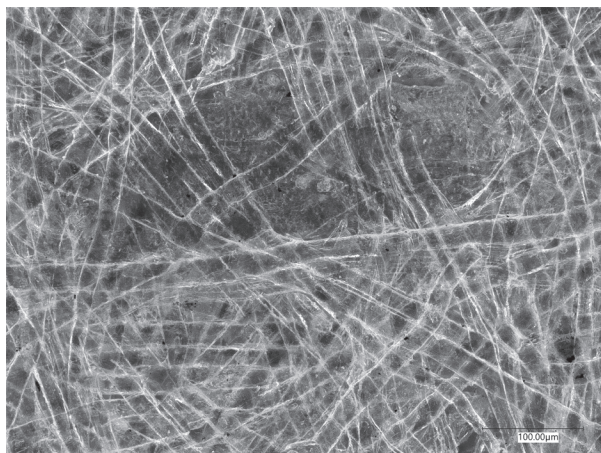
ここまで調査したところ、あるいは、この後にも観察するところでは、一群の薄雲の巻（表二参照）の場合、紙質においてその共通性を見出すことができた。「為家本」の基幹ともいえるべき若紫・賢木・蓬生・薄雲・真木柱の五巻があり、さらに第二章の【表一】に挙げた「伝藤原為家筆大四半切と類似する形態の諸本」があった。そこに示された諸巻と僚卷あるいはツレの関係を紙質の調査から見出せるものかどうか、これが当面の課題になるであろう。本章はこの点を模索する必要がある。

【図10】はこれまで見た【図9】のツレ、伝為家筆薄雲の巻切の一つ、「かく心にこめのこされて」の全体像である。この古筆切五行目「心にくまある事」の「あ」字の近辺を五〇〇倍にした画像が【図11】である。真木柱の巻断簡である【図7】、薄雲の巻断簡である【図8】と同様な形態でガンピ繊維が見られる。画面中央のやや上寄り横長に色濃く見える箇所である。しかもその色濃い部分の中央に、ウロコ状の模様が見える。植物組織にある導管が混入したものである。

【図10】 伝為家筆薄雲の巻切「かく心にこめのこされ」



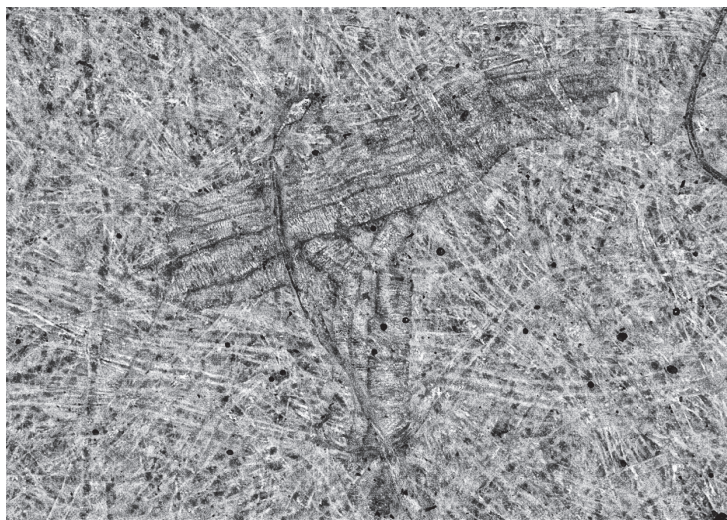
【図11】伝為家筆薄雲の巻切「かく心にこめのこされ」五行目五〇〇倍画像



【図12】は、【図7】の薄雲の巻の古筆切「きこゆるに御いらへも」の中央付近、五行目「わさならねは・かけと、め」とある朱点「・」の付近の画像。一〇〇倍という低倍率の画像であるが、画面中央にカタカナの「イ」字形に繊維がウロコ状に密集しているのが見える。【図11】と同じくガンピの導管である。これらは、ガンピの靱皮繊維に小枝を混入させたまま叩解したために残存した導管組織であり、コウゾの大きく粗い導管組織とは異なる（江南和幸の教示）。紙漉きの際に、いわゆる「チリ取り」しきれなかった例である。この一連の用紙にガンピが混ぜ漉きされている一証でもあり、ツレの存在を指し示す例でもあった。

「為家卿 幻之巻全部 一卷（琴山印）」の極札のある幻の巻、これも【表二】に挙げた「為家本」の一部とすべしとされる卷子本で、本文ほぼ完備の一卷である。筆跡その他、ツレであるか否か慎重に検討すべき一卷であるが、ここでは紙質に限定して観察してみることしよう。

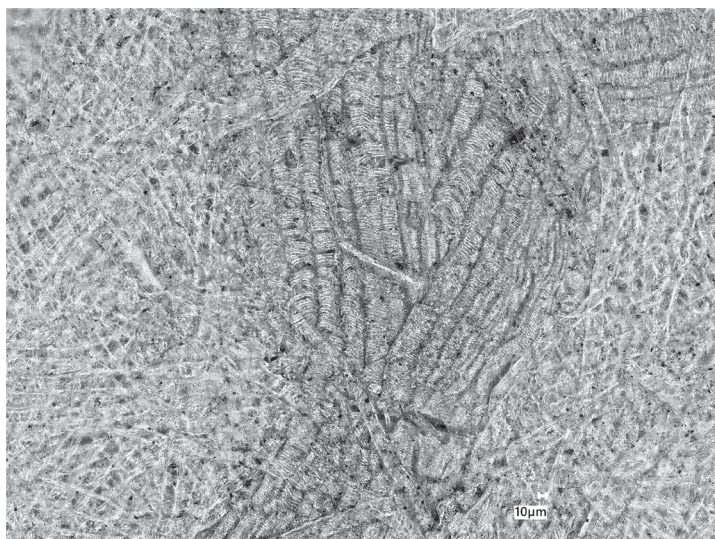
【図13】は、幻の卷子第一紙一行目の一部、三〇〇倍の画像である。中央に導管組織の存在感が大きい。倍率を上げると画面いっぱいには導管ばかりがクローズアップされてしまい、周囲のコウゾを中心とする靱皮繊維との対比ができ



【図12】薄雲「きこゆるに御いらへも」100倍 靱皮導管

なくなるため、あえて低倍率にしてある。

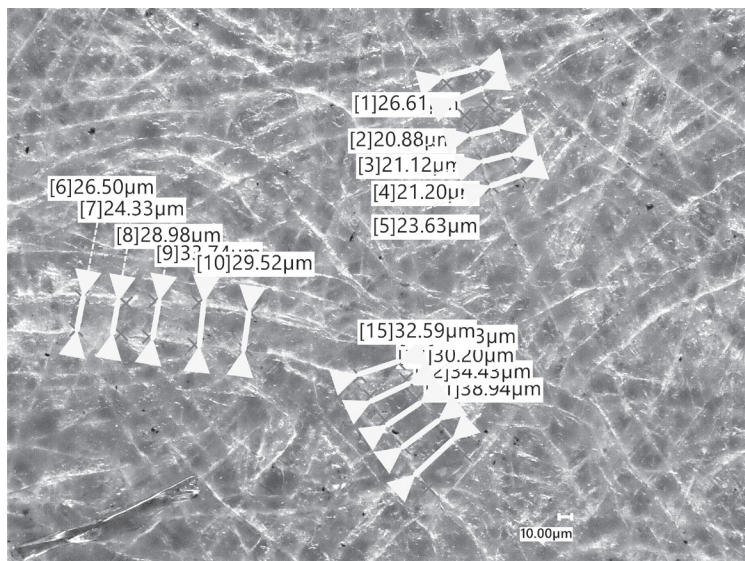
真木柱の【図7】、薄雲の【図8】【図10】【図11】、



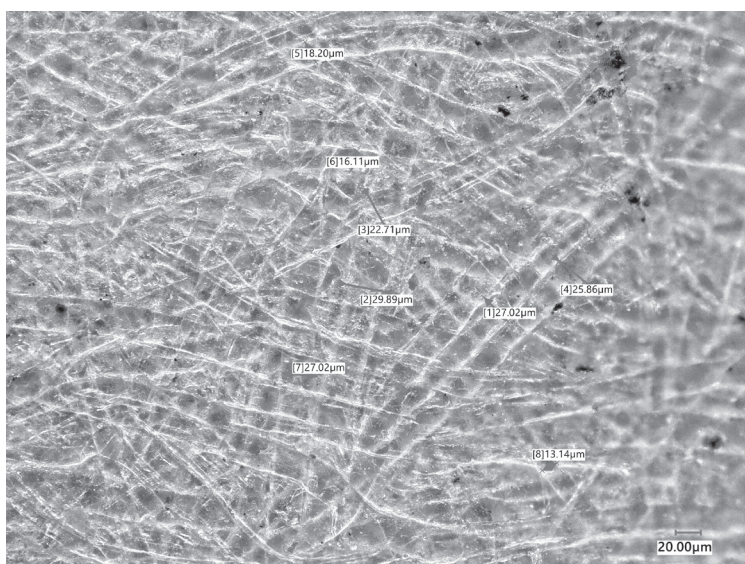
【図13】「為家本」幻の巻・第1紙1行目 300倍 雁皮導管

幻の【図13】と、「為家本」の基幹とされる複数巻に共通の紙質を

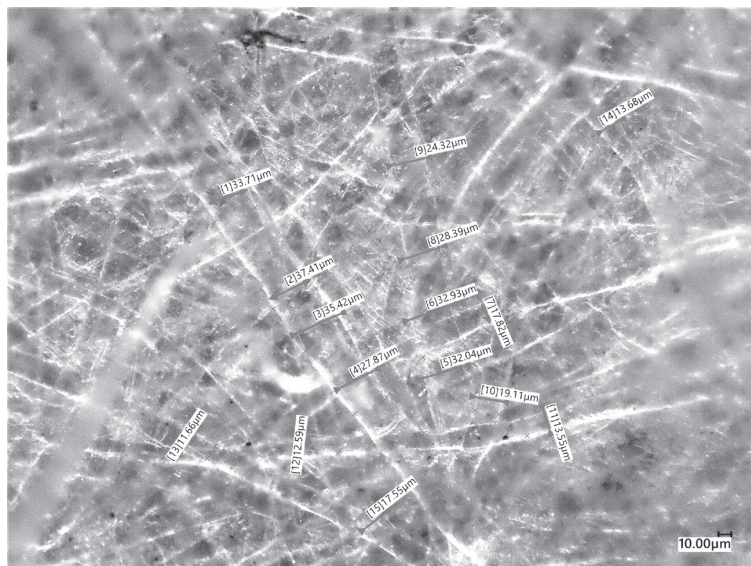
見出すことは偶然ではあるまい。維管束のある植物に導管を見出すのは当然であるが、コウゾのそれとガンピでは全く異なる。同様にコウゾより細い繊維を有するミツマタがあるが、ミツマタを紙の原材料にするのは「為家本」より遙か後代のことであり見誤りようがない。ここまでガンピの導管の形姿に注目してきたが、用紙全体の Morphology はどうだろうか。次の【図14】は、幻の巻第一紙三行目（ひ）とつは・かなしさの「〔・〕は朱点」とある「な」字の近辺の画像である。繊維幅の計測値が入っている。下段の【図15】は薄雲の巻の断簡から任意に選んだ一葉「おほししるうへの」の一行目「への」二字の中間部分。両図とも五〇〇倍画像で対比してみた。ともに打紙が、それともかなり丹念な作業の様相を呈していると見てよいのではないか。【図14】幻の巻の場合は、計測した一五点の繊維幅の全平均は2829μm。但し、右上の計測域[1]～[5]の平均は2269μm、



【図 14】「為家本」幻の巻・第 1 紙 3 行目 500 倍 繊維幅計測



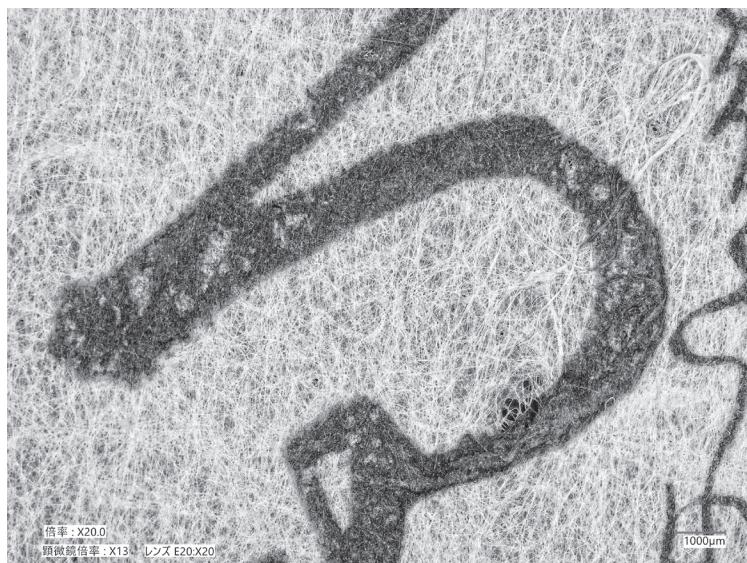
【図 15】薄雲「おほししらるうへの」500 倍 繊維幅計測



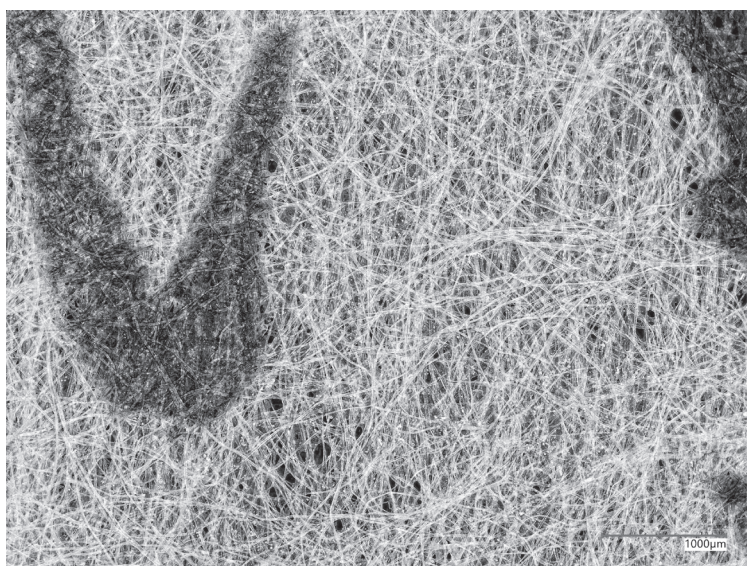
【図16】真木柱「ゆるされありてを」500倍 繊維幅計測

左の計測域〔6〕の平均は2861 μm 、右下の計測域〔11〕の平均は3404 μm 。【図15】薄雲の巻の場合は、計測した八点の繊維幅の全平均は2249 μm 。幻の巻の場合の方が打紙の強度がより大きかったと見なすこともできようし、近似値を見出すということでもよいかも知れない。いずれにせよ、全体のMorphologyでは繊維が稠密であり、同様の工程を経た用紙と見ることに誤りはないであろう。

【図16】は前掲の真木柱の巻断簡「ゆるされありてを」の三行目「いとつらし」の「とつ」二字間の五〇〇倍画像である。計測した一五点の繊維幅の全平均は2387 μm 。これも繊維の隙間なくびっしりと打ち込まれた紙である。打紙がなされないか、もしくは不十分な用紙は、目視でもある程度の判別はつくが、マイクロスコープの映像では一目瞭然である。



【図 17】 慶長年間古活字版「桐壺」冒頭 20 倍画像
(実践女子大学図書館黒川文庫蔵)



【図 18】 『湖月抄』 「桐壺」冒頭 50 倍画像
(実践女子大学図書館黒川文庫蔵)

上段【図17】は、実践女子大学図書館黒川文庫蔵・慶長年間古活字版「桐壺」の冒頭「いつれの御時」の「つ」を二〇倍に拡大した図である。「つ」の湾曲の終息の辺りに孔があるのは虫損ではない。漉きむらである。下段【図18】は、同図書館山岸文庫蔵「湖月抄」「桐壺」の冒頭「いつれの御時」の「い」の近辺の五〇倍の図像である。あちこちに漉きむらの孔があり、紙の下に敷いた黒の羅紗紙が透けて見えている。室町時代最末期・江戸中期の用紙と鎌倉中期のそれとでは比較になりにくい、「為家本」が対極の一方にあることを示すことになるはずである。

七 「為家本」研究の今後

これまでの論述をまとめ、「為家本」の今後の課題を展望しておこう。

- (1) 伝藤原為家筆源氏物語大四半切の原型である冊子本は一二世紀中葉の書写であり、「伝藤原為家筆本（為家本）」と仮称しうる、『源氏物語』現存諸本中でも古写に属する重要伝本と位置づけるべきである。
- (2) 「為家本」に擬せられる諸巻が残されている。「為家本」を復元する過程では古筆切は本文資料たりうる。
- (3) 従来の書誌学は経験値に拠るところが大きい。そのために判断に揺れが生じる場合がある。高精細デジタルマイクロスコープは、目視に依存した部分に光学的証明を与え、絶大な力を発揮する場合がある。「為家本」の紙質に対する判断に揺れがあったが、次の(4)(5)が科学的に証明された。
- (4) 和紙は、古く溜漉きの時代から流し漉きの時代に入っても、仕上げに「打紙」加工が施される。『源氏物語』などの写本にも「打紙」されている。但し、「為家本」の用紙はことさら丹念な打紙加工が施されており、類例を見ない。
- (5) 「為家本」はコウゾ主体の紙に書写されているが、繊維・導管組織などの夾雑物によりガンピの混ぜ漉きが証明さ

れる。

(6) 今回の「為家本」の調査は薄雲の巻断簡を軸に行ったが、真木柱の巻・幻の巻の断簡にも、紙の組成・打紙加工などの表情(Morphology)に共通性が認められる。

これらのうち、(5)については、コウゾとガンピの割合を数値化できるか否かについては、現在も検討中である。

(6)については、基幹とされる薄雲・真木柱の巻断簡の間で共通性があるのは当然として、「為家本」に擬せられる諸巻が同列に論じられるか否か、もまた今後の大きな課題である。

マイクロスコープは非破壊測定ではあるものの、実践女子大学所蔵品以外は調査しづらい現実がある。そのため、次稿以後はとりあえず身近にある賢木の巻断簡、幻の巻の卷子本を精査するところから始めなければならないと考えている。

(横井・澤山)

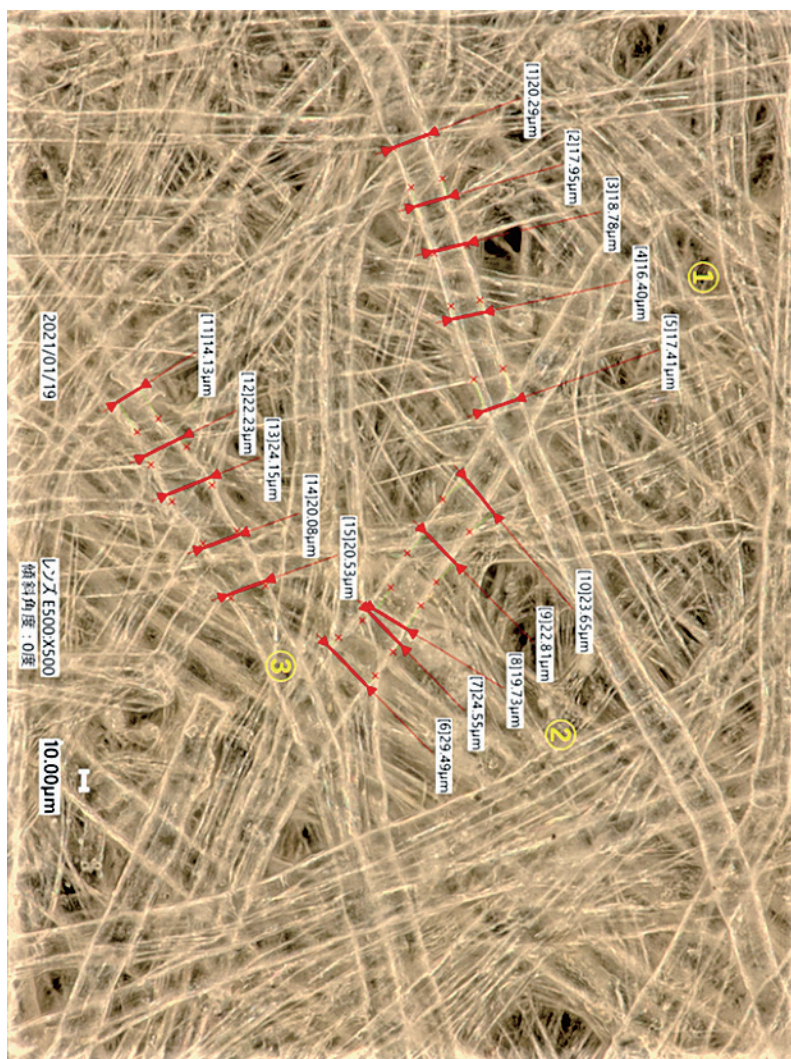
謝辞

本稿の根幹は文中にも言及したごとく、江南和幸・龍谷大学名誉教授の指導と提供された覚書に拠る。本来共著者として名を連ねるべきであるが、ご本人の意向により引用の形に留めた。その教示なければ本稿は成らなかつた。記して謝意を表す。

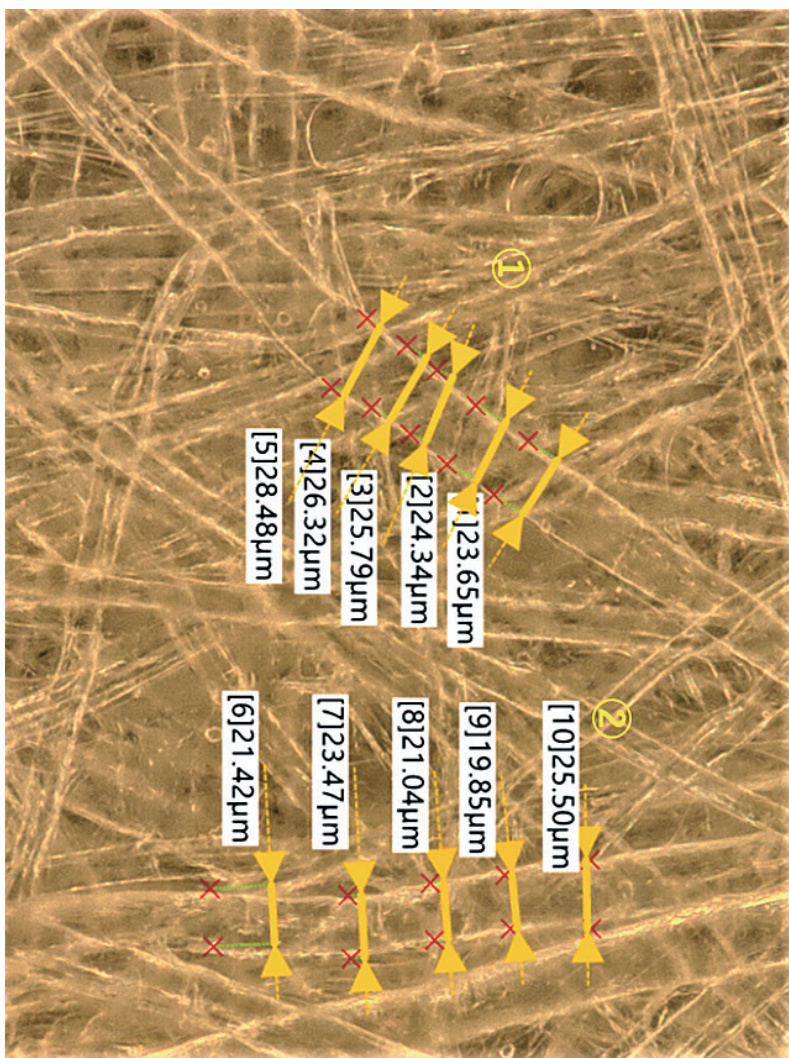
付記

本稿は、二〇二一年度科学研究費補助金・基盤研究(B)「『源氏物語』写本の非破壊分析による書写年代推定法の開発と河内本の再評価」(課題番号21H00608・代表者＝横井)による成果の一部である。

再校時、為家本の紅葉賀一卷が紹介されたのに接した(安達敬子「京都府立京都学・歴史館寄託『源氏物語』紅葉賀巻の紹介と翻刻——山本読書室資料と「伝為家筆本源氏物語」」『京都府立大学学術報告 人文』第七三号、二〇二一年二月)。本稿には時期的に反映できなかった。後考に俟ちたい。



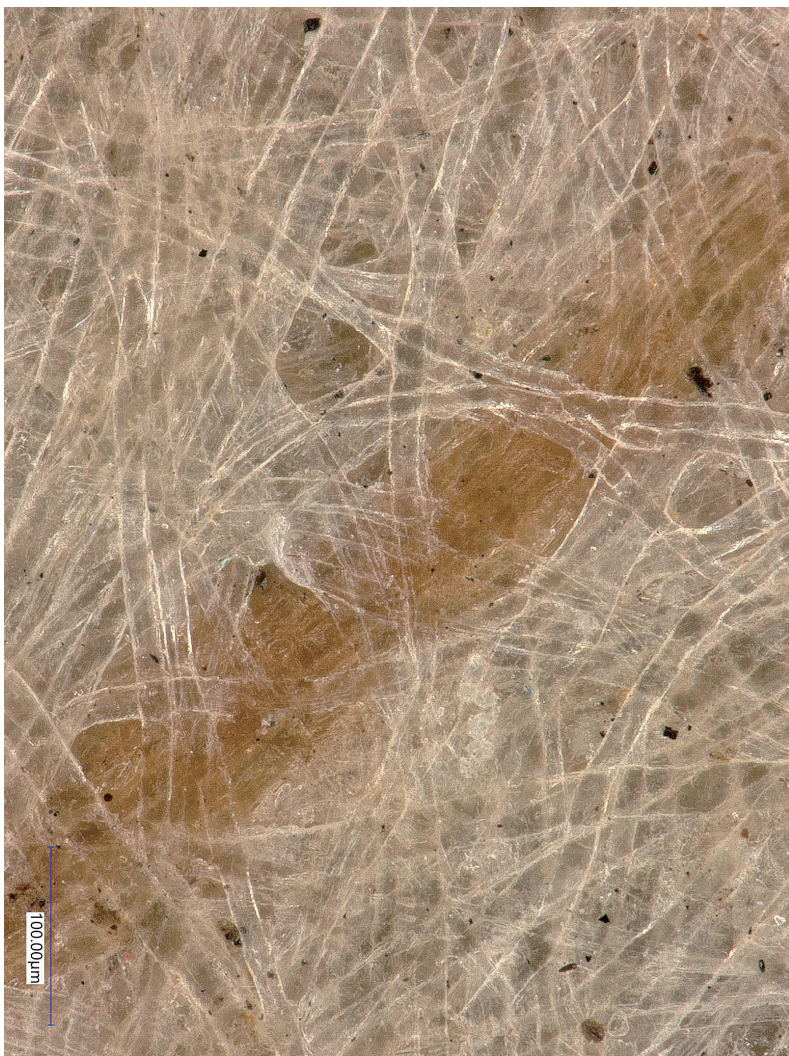
【図3】 紙の温度：古代紙カンピ・打紙



【図4】 紙の温度・高野紙コウゾ・打紙



【図7】 為家本 20191009_112654 「ゆるされありて」 3行わき字右横 x200-2-compo



【図8】 為家本 20191113_702 「きこゆるに」 1行ゆ字左 x500-1-compo ring